

新ひだか町の農業2021（令和3年）

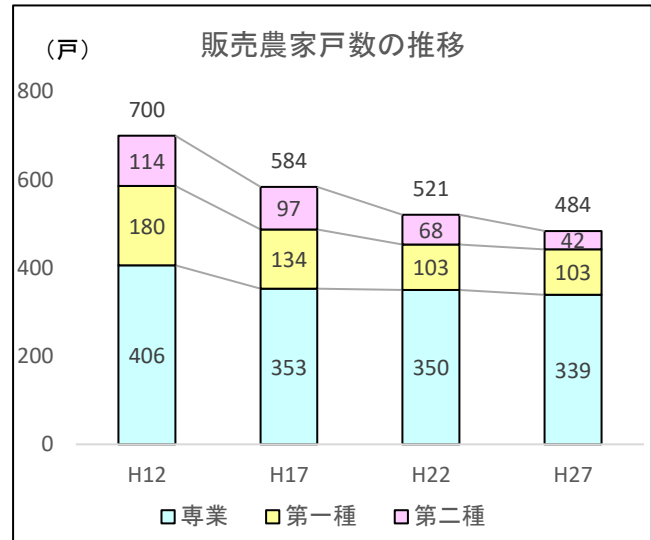
1 農家戸数等

農家戸数、農家人口は共に減少傾向にあり、平成12年の700戸の販売農家戸数は平成27年では484戸となり、約30%が減少しています。その減少は、第一種と第二種の兼業農家の割合が高いことから、専業農家の割合が高くなっていることがいえます。

農家人口は、平成12年の2,823人が平成27年には1,557人となり、約45%が減少しています。

農業就業人口（自営農業を主として従事した世帯員数）は、平成12年の1,772人が平成27年には1,090人となり、約40%が減少しています。

また、そのうち65歳以上の割合が40%を占め、就業者の高齢化が進んでいることがいえます。



資料：農林業センサス

農家戸数及び農業就業人口等の推移

区分	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	27年/12年
販売農家戸数(戸)	700	584	521	484	69.1%
農家人口(人)	2,823	2,243	1,837	1,557	55.2%
農業就業人口(人)	1,772	1,405	1,254	1,090	61.5%
うち65歳以上割合	36.5%	34.9%	38.7%	40.3%	-

資料：農林業センサス

新規就農者は、町の振興作目を「ミニトマト・花き・和牛」としていることから、この作目での就農者となっています。

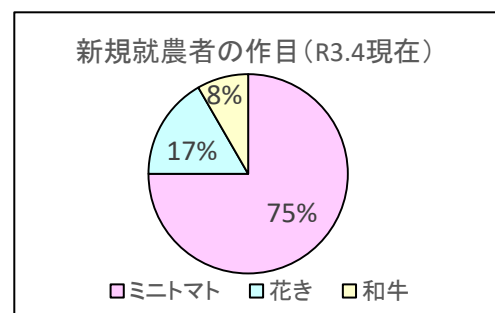
本格的に新規就農者の受入体制を構築した平成25年から令和3年までの就農者は36名となり、新規参入者は31名、親元就農は5名となっています。そのうち、ミニトマトは27名、花きは6名、和牛3名となっており、75%がミニトマト就農者となっています。

新規就農者数の推移

(人)

区分	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	計
新規参入	1	1	3	5	7	5	4	2	3	31
親元就農					2	3				5
計	1	1	3	5	9	8	4	2	3	36

資料：農政課調



2 耕地面積

平成27年の耕地面積は、9,180ha（田15.9%、畑84.1%）で、10年前の平成17年と比較して約3%の減少となっています。内訳としては、畑が99.5%に対し、田は94.2%となっており、田の減少が進行している状況にあります。

経営耕地面積 (ha)

区分	平成17年	平成22年	平成27年	27年/17年
耕地面積	9,310	9,260	9,180	98.6%
田	1,550	1,540	1,460	94.2%
畑	7,760	7,720	7,720	99.5%

資料：耕地及び作付面積調査

3 経営規模

平成27年の1戸あたりの平均経営耕地面積は、約19haで、全道平均の約30haを大幅に下回っています。

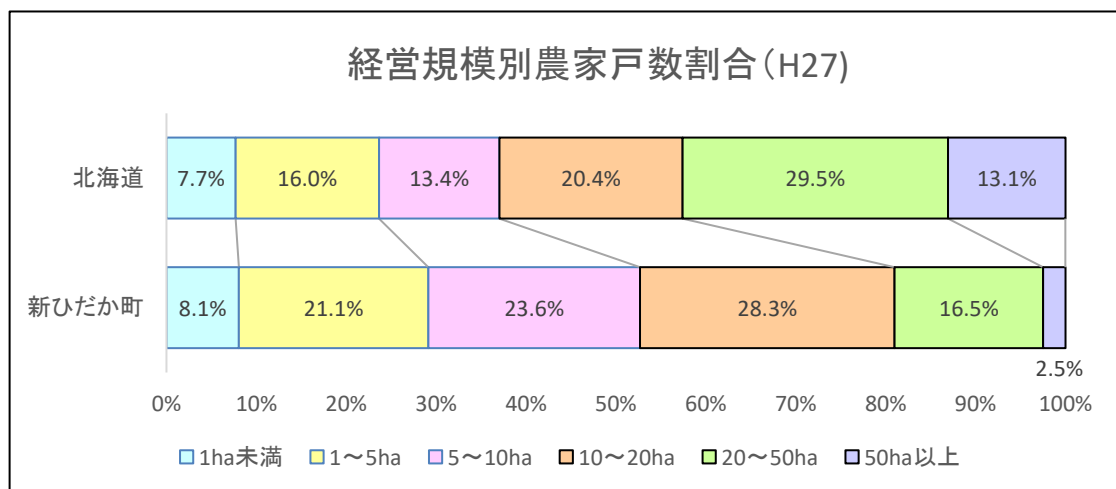
特に、10ha～20haの階層が最も多く、全戸数の28.3%を占めるが、20ha以下の階層で見ると81.1%と北海道の57.5%と比較すると中小規模経営の農家が多いことがいえます。

また、農家戸数が減少している一方で、1戸当たりの経営面積が増えており、離農等に伴う軽種馬農家や肉用牛農家への農地の集積が進んでいる状況にあります。

経営規模別農家戸数の割合(H27販売農家) (戸)

	1ha未満	1～5ha	5～10ha	10～20ha	20～50ha	50ha以上	計
新ひだか町	39	102	114	137	80	12	484
北海道	2,930	6,075	5,097	7,760	11,253	4,971	38,086

資料：2015農林業センサス



資料：2015農林業センサス

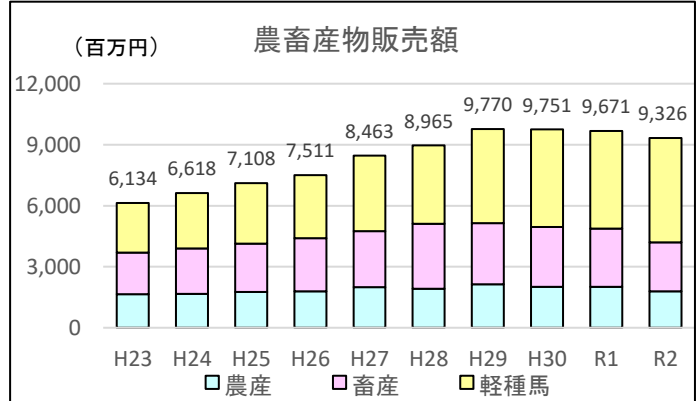
4 農業生産

農畜産物の販売額は、平成29年の9,770百万円をピークに令和2年は9,326百万円となっています。内訳としては、軽種馬がその55%を占め、軽種馬を除く畜産（肉用牛・酪農他）と農産（花き・青果・米他）が45%となっています。

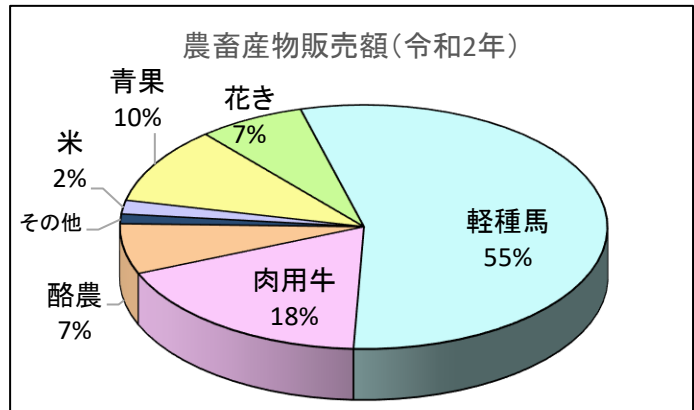
農産と畜産の構成比は、ほぼ同じであり、農産はミニトマトを主力とする青果と花きが主な農産物で、畜産は、酪農をはじめ、育成・肥育の肉用牛が中心となっています。

令和2年の主な農畜産物の生産・販売状況は、新型コロナウイルスの影響を受けた農畜産物が顕著に表れた年となりました。特に、花きと肉用牛は、イベント等の自粛や外食産業の消費減少により、花きでは137百万円、肉用牛では肥育、育成合わせて294百万円の販売額が減少しました。

しかしながら、軽種馬については、中央競馬、地方競馬の開催継続やインターネットでの馬券発売の好調により、ホッカイドウ競馬の発売額や北海道市場での軽種馬販売額も過去最高の成績となりました。



資料:JA調(みついし・しずない)



資料:JA調(みついし・しずない)

主な農畜産物の生産・販売状況

区分	令和2年		令和元年		増減	
	生産量	販売額	生産量	販売額	生産量	販売額
	(俵・t・千本・kg・頭)	(千円)	(俵・t・千本・kg・頭)	(千円)	(俵・t・千本・kg・頭)	(千円)
米	12,214 俵	169,795	12,782 俵	186,017	△ 568 俵	△ 16,222
ミニトマト	1,245 t	832,536	1,383 t	913,120	△ 138 t	△ 80,584
トマト	107,593 kg	34,612	124,283 kg	35,217	△ 16,690 kg	△ 605
胡瓜	61,507 kg	21,378	63,409 kg	18,310	△ 1,902 kg	3,068
ほうれん草	63,664 kg	37,708	65,303 kg	36,934	△ 1,639 kg	774
花き	6,551 千本	659,981	7,015 千本	796,988	△ 464 千本	△ 137,007
アスパラ	15,734 kg	21,740	14,049 kg	19,358	1,685 kg	2,382
農産計	-	1,777,750	-	2,005,944	-	-
生乳	6,387 t	620,547	6,554 t	617,479	△ 167 t	3,068
肉用牛(育成)	1,644 頭	1,083,087	1,632 頭	1,226,911	12 頭	△ 143,824
肉用牛(肥育)	504 頭	600,376	570 頭	750,718	△ 66 頭	△ 150,342
畜産計	-	2,304,010	-	2,595,108	-	△ 291,098
農畜産合計	-	4,081,760	-	4,601,052	-	△ 519,292
軽種馬	605 頭	5,118,360	595 頭	4,801,324	10 頭	317,036
総合計	-	9,200,120	-	9,402,376	-	△ 202,256

資料:JA調(みついし・しずない)

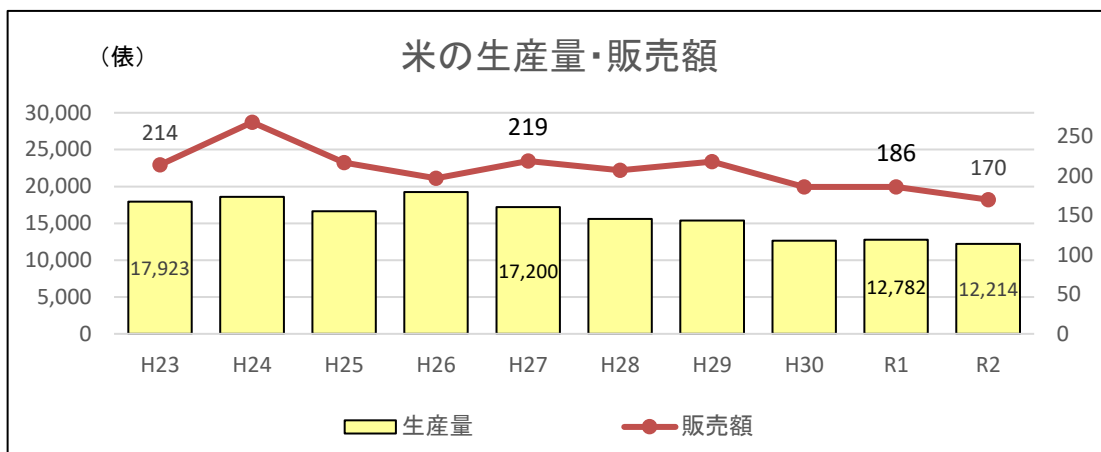
5 農畜産物の生産状況

(1) 水稻

水稻作付面積は毎年減少し、令和2年は225haと転作率は約9割となっており、これに伴い生産量、販売額も減少傾向にあります。

令和2年の作況指数は、北海道が106、日高管内は108の「良」となる豊作に恵まれるとともに、出荷数量の1等米比率は、100%と全道平均（89.7%）、全国平均（72.4%）を上回る水準となっています。

また、売れる米づくりを進めるため、特別栽培米の「万馬券」（JAしずない）や低タンパク米「トキノミノル」（JAみついし）として馬産地にちなんだ独自ブランドでの販売に取り組んでいます。

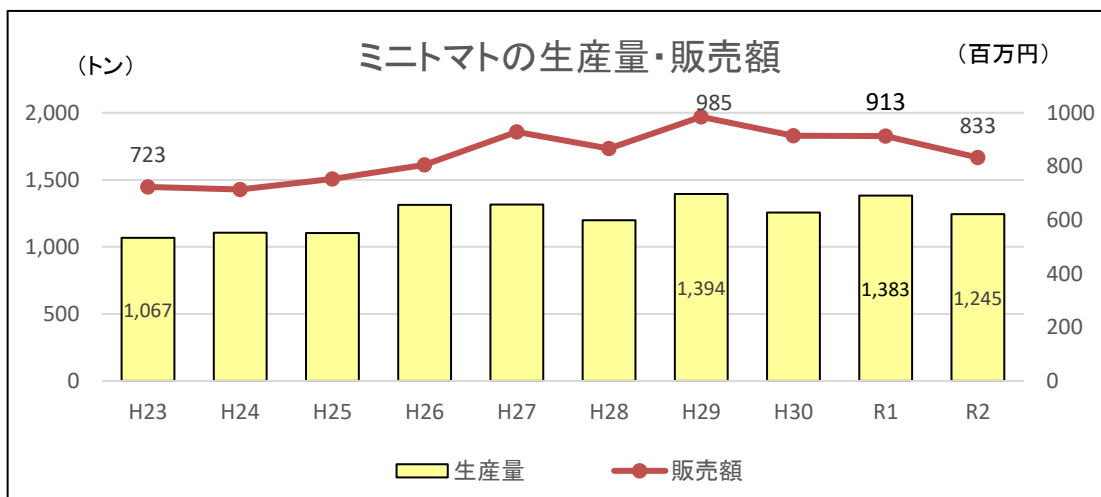


資料:JA調(みついし・しずない)

(2) ミニトマト

ミニトマトの栽培戸数、作付面積は、新規就農者の増加等により、生産量、販売額も増加傾向にあります。促成、半促成、抑制栽培の栽培体制を確立し、5月から11月までの安定した長期出荷体制で、キャロル10を統一品種とした「太陽の瞳」のブランド銘柄で道内外市場に出荷しています。

単価も近年は600円/kg以上と高水準を維持しており、令和2年は前年よりも高単価とはなりましたが、春先の曇天や夏の高湿障害による生産量の減少が大きく影響し前年を下回り、前年対比で生産量は10%、販売額は8%の減少となりました。



資料:JALしずない調

(3) 花き

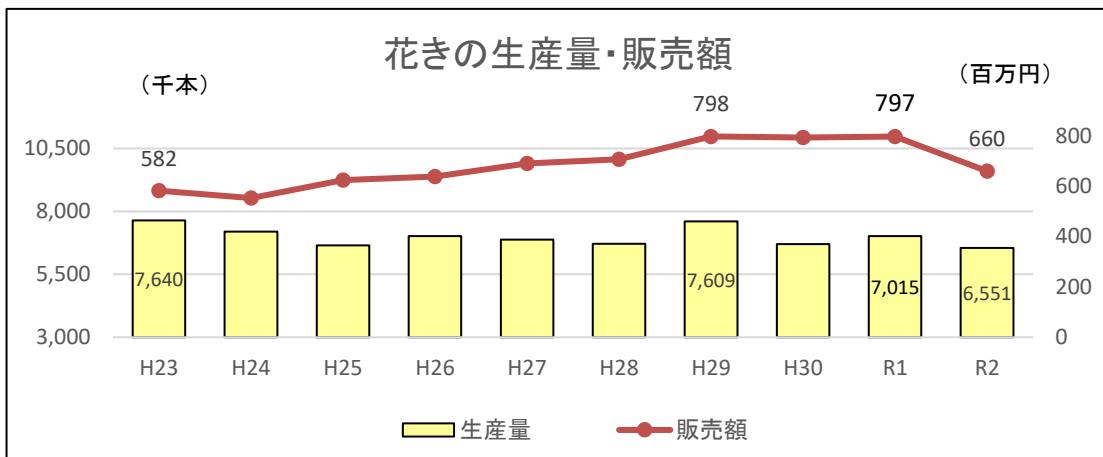
花きは、三石地区を中心に静内地区、浦河町の栽培農家による広域出荷体制で定時定量出荷を確立し、関東・関西を中心とする道内外に「みついし花だより」の統一ブランド銘柄で出荷しています。

生産する花きの約6割はデルフィニウムが占めており、5月から11月の出荷量は全国一となり、主に冠婚葬祭用として取り扱われています。

近年は、新規就農者も参入しており栽培面積も増えていますが、生産量は横ばいとなっているものの、販売額は増加傾向にあります。

しかしながら、令和2年は、新型コロナウイルスの影響により冠婚葬祭や各種イベントの自粛による花需要の激減や単価の著しい下落から販売額も660百万円と前年対比で約17%の減少となりました。

また、輸送体制も航空便の減便でトラック輸送への切り替えに対応するため、出荷体制も2日前出荷への変更を行い、継続した市場への供給を行いました。

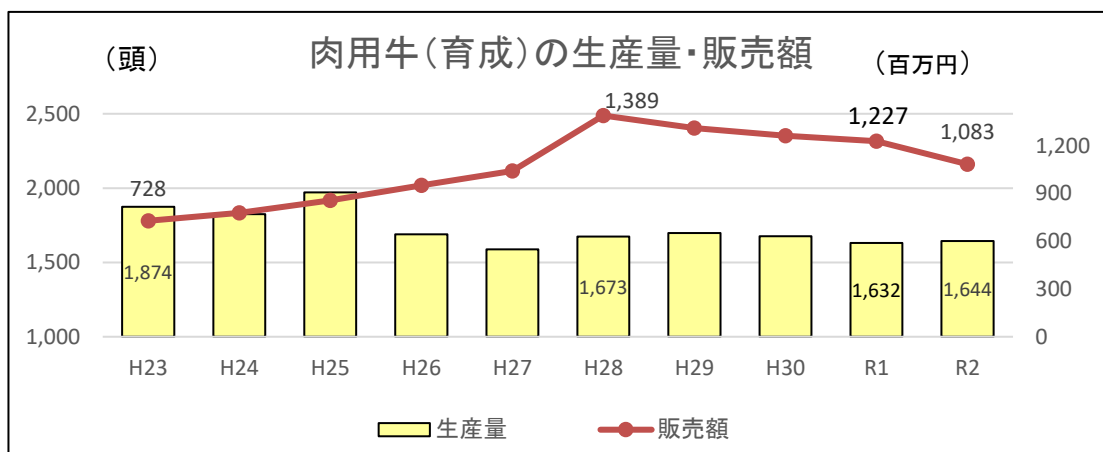


資料:JAみついし調

(4) 肉用牛 (育成)

子牛市場での1頭当たりの平均販売金額は高値水準にあり、出荷頭数はここ数年横ばいですが、販売額は平成28年をピークに減少傾向となっています。

令和2年は、新型コロナウイルスの影響による外食産業での和牛消費の停滞に伴う枝肉相場の落ち込みが子牛価格においてもその影響を受け、1頭当たりの販売単価が下落し、販売額も1,083百万円と前年対比で約12%の減少となりました。

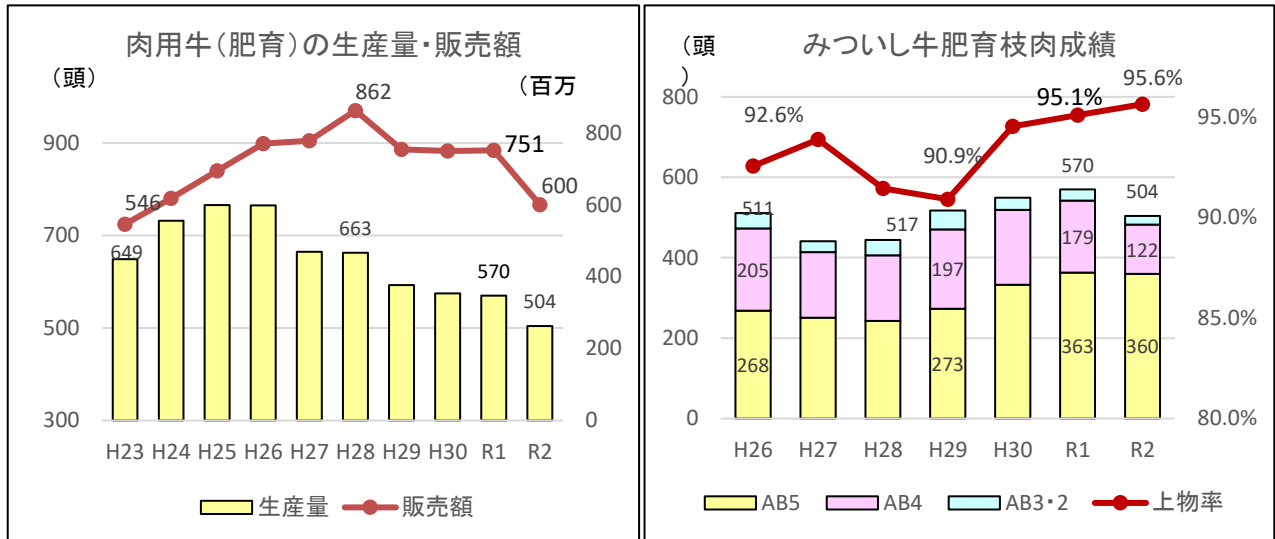


資料:JA調(みついし・しずない)

(5) 肉用牛（肥育）

肥育牛については、町内外農家による広域出荷体制を組み、一貫肥育により「みついし牛」のブランド銘柄として東京食肉市場へ出荷しています。枝肉成績の上物率は90%以上を維持し、令和2年は95.6%と高い水準を達し、品質、食味も高く評価されています。

和牛枝肉価格は、平成23年頃から外国人観光客の増加に連動に伴い上昇し、平成28年の862百万円をピークにその後は下降傾向にあります。令和2年は新型コロナウイルスの影響により外食産業では消費が低迷、特に、インバウンド需要で下支えされていた和牛枝肉価格が著しく下落し、生産頭数は504頭で前年対比12%の減少でありましたが、販売額は前年対比で約20%の減少となりました。



資料：JAみついし調

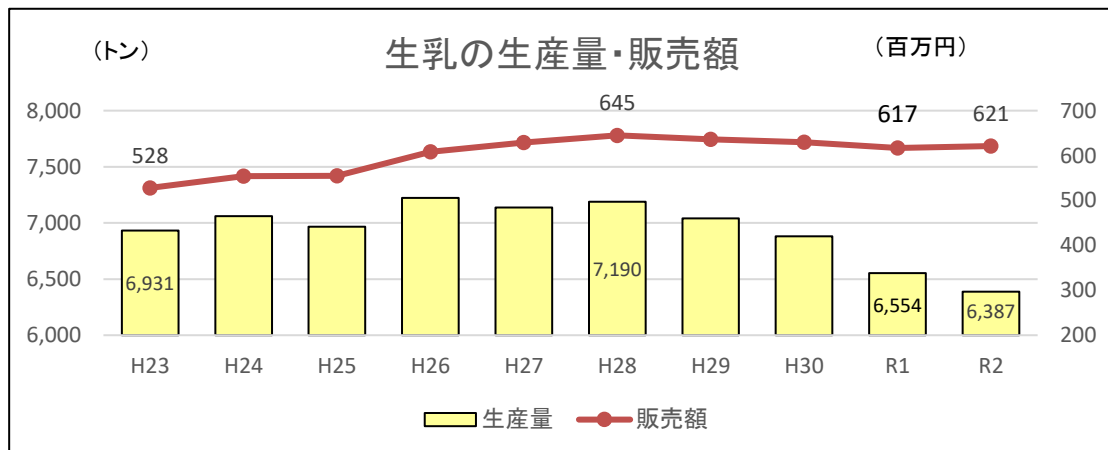
資料：JAみついし調

(6) 酪農

生産量は平成28年の7,190トンをピーク減少傾向にあります。生乳価格の上昇により販売額はほぼ横ばいで推移しています。令和2年は生産量が6,387トンで前年対比約3%減ですが、販売額は621百万円で前年対比約1%の増となっています。

乳質については、酪農家の自助努力により乳質改善に取り組んでおり、生菌・体細胞比率では日高管内平均を上回る水準となっています。

また、酪農ヘルパーの利用促進により過重労働の軽減に努めています。



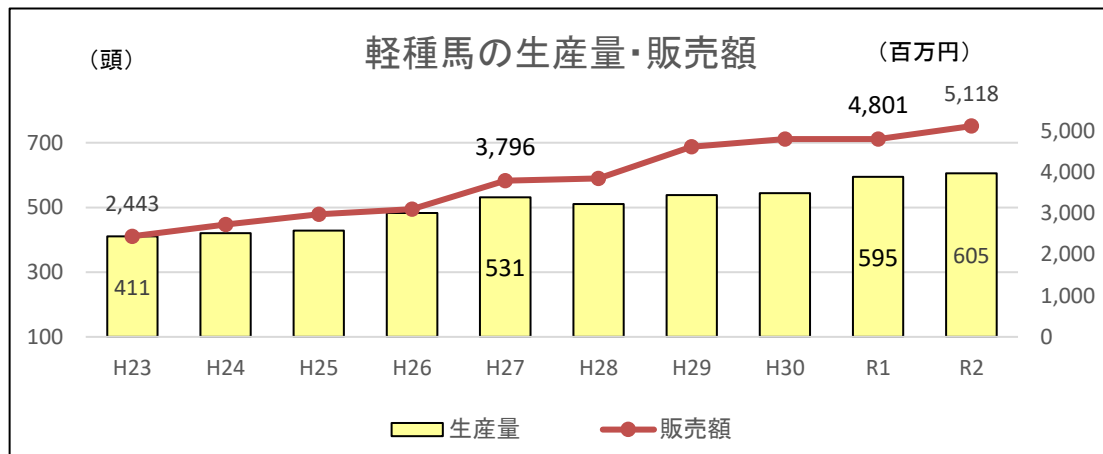
資料：JA調(みついし・しずない)

(7) 軽種馬

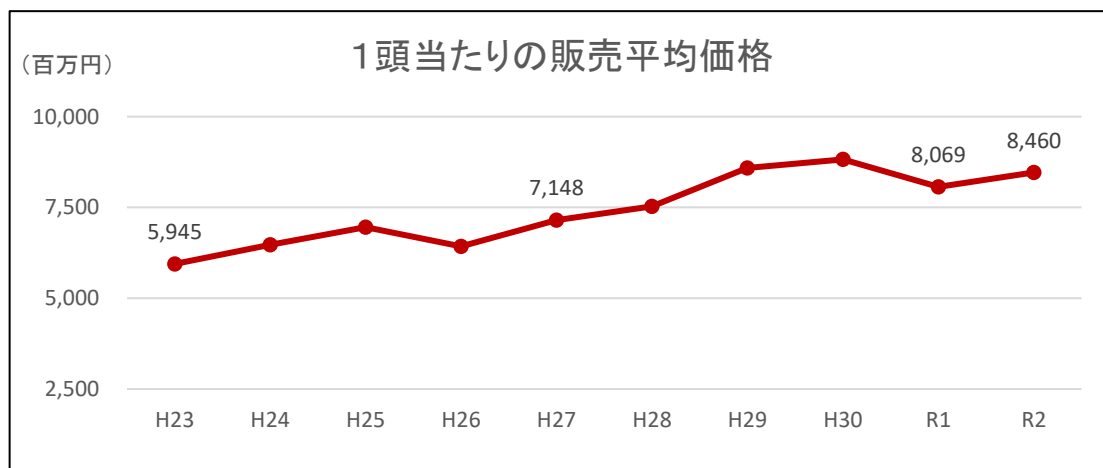
軽種馬においては、新型コロナウイルスの影響によりトレーニングセールが中止となるものの、その他の市場は例年どおり開催され、販売額は5,118百万円と過去最高を記録しました。

また、1頭当たりの販売平均価格も上昇傾向にあり、令和2年では前年対比で約5%の減少となりましたが、売却率は78.9%と前年より1.5ポイント増となりました。

新型コロナウイルスの感染が心配される中で、北海道市場による軽種馬販売が好調だったのは、競馬開催が順調に開催されたことや株式市場等の活況等により馬主の購買意欲が高まったことが要因と考えられます。



資料: JA調(みついし・しずない)



資料: JA調(みついし・しずない)